第30回　特別研究会

「大学教育のあり方」

―「何を」教えるかではなく「どのように」―

土　田　友　章

１９９４年　3月１７日　　南山短期大学にて

■ 特別研究会

『大学教育のあり方』

——「何を」教えるかではなく「どのように」——

土田友章（つちだともあき）

1945　東京に生まれる
1970　東京大学文学部宗教学宗教史学科卒業
1972　東京大学大学院博士過程中退
1986　米国ハーヴァード大学博士課程修了（比較宗教史）
　　ポモナ大学講師、タフツ大学講師、名古屋聖霊短期大学助教授などを経て
現在　南山大学外国語学部助教授、社会倫理研究所研究員
専攻　比較宗教史、比較生命倫理学
論文　「正法眼蔵谿声山色注解」「正法眼蔵一顆明珠注解」「日本人のエートスと生命の倫理学」"From Ethos to Ethics:Japanese View on life and Death" ほか

大森：第３０回の特別研究会をこれから始めたいと思います。講師は南山大学の土田先生です。皆さん、もうご存じだと思いますが、今南山大学の外国語学部、日本語学科で教えてらっしゃいます。ご専門は比較宗教史です。それから生命倫理の方でずいぶんご活躍で、実は一昨日までアメリカのその会議に出てこられて、お帰りになったばかりです。大変お疲れなんですが、それを承知で、元々知っていながら、無理に今日お願いしたという経緯があります。皆さんと一緒に、先生のお話を聞いて、これからの役に立てたいと思うので、お呼びした次第です。土田先生はアメリカのいくつかの大学でも教えられた経験がおありですので、アメリカの大学の様子なんか、非常にお詳しいと思います。その事を楽しみにして聞けるんじゃないかと思います。一応テーマは『大学教育のあり方』—「何を」教えるかではなく「どのように」—という風に勝手に私が付けましたので、これと違うかもしれませんけれども。常々先生は高等教育の意味というか、そういうものをもう少し考え直すべきじゃないかというようなことを考えておられますので、こういう線にそってお話し頂いて、私たちにとっても考え直さなければならない問題をご提起頂けるんじゃないかと思います。それで、さしあたり先生の方から一時間か、あるいはもうちょっと一時間半くらいお話し頂いて、その後皆さんの方で質疑応答なり、いろんなことをして、一つの、望むらくはある見解に達したらいいんですが。そういうことが出来るかどうかどうかわかりませんが、そこに至るようにこの会を進めて頂きたいと思います。先生よろしくお願い致します。

土田：今日はお招き頂きましてありがとうございます。私の方が南山短大の先生方から学びたいことが沢山ございまして、実はそういう事をshare、わかちあうことが出来ればと思って、僭越ながらあえて参った次第です。本当に私の方からは語るべき事はありません。ただ一応アメリカの大学の潮流といいます

か、どういう傾向にいっているかということが多少なりともご参考になればと思いますし、それから私は自分自身大学を出て以来ずっと疑問に思ってきた、そして現に今日本の大学で教えていて、まだ疑問に思っていることなどありますので、その辺をお話しながら、皆さんからいろいろと教えていただければと思います。

今日は、現代の大学教育がどのような力を受けて、どのような方向に行こうとしているのか。これについても今更私などが申すまでもないことですが、私なりに若干整理させていただきます。

一つは技術社会化・大衆社会化の状況でして、それが大学教育、とりわけ人間学・文化学に及ぼしている力であります。第二には、そうした状況のなかで、人間学的な教育への一視点でありますが、それを「教育の倫理」というかたちで捉えておきます。

［生命倫理学という問題状況を手がかりに］

私自身がこの１０年ほど関わってきた学問の一分野に生命倫理学というのがあります。医学の高度科学技術化と市民権運動の高まりなどを背景としてアメリカで１９７０年代から起こってきまして、今では十分に一つの専門分野として確立したと申せます。アメリカでは教科書も多く書かれていますし、その中での細分化・専門化も始まっています。日本の医学も、近年では非常に多くアメリカの影響を受けており、医療が高度の科学技術へと成長し（科学技術的体制の次元）、また社会化していること（国民医療・健康の社会的・経済的次元）でも、いわゆる先進国のうちに入っております。ということは、日本でも、従来の、医師たちの仲間うちでの、職業倫理ではとても解決できない問題、たとえば脳死を人の死と認めるか、臓器移植をどこまで受け入れるか、現在のところまだ実験医療である遺伝子治療を我々も行なうのかなど、広範な人間的・社会的な問題状況に直面しているはずなのです。

医療の進歩は、科学技術のもっとも素晴らしい恩恵として賛美しないものはいないほどですが、しかし、ふと気がついてみたら、医学の進歩が我々を（たとえば死ぬことについては皆平等というような死生観的・生命観的共同性などに裏打ちされた）人類共同体から個人を析出し、更に身心を具えた一つの統合であると信じていた人を脳幹だとか臓器だとか免疫系だとかに部分化してしまい、そうした分断のあとで突如として、（それまで宇宙自然的一体観に生きていた日本人にも）部分化された臓器や個人的事情にされた死についての権利行使者として振舞うことを要求するようになっていた、というわけです。こと此処に至って日本人は西欧近代の方式に戸惑いを感じはじめました。すなわち、科学技術のレヴェルでも、（それよりは低い程度においてですが）経済・社会のレヴェルでも、これらの面では非欧米圏では最も熱心に近現代欧米をモデルとしてきた日本人も、こと文化的なこと、「常民の心意」のなかでももっとも

奥深い生命観などに関わること、になりますと、決してアメリカ社会などと同様の思想・行動に遽かには移れないのです。科学技術と、その主体である人間と、社会組織とが、それぞれある位相に入って共働し近代西欧の価値行動を生み出し拡張してきたのですが、日本人の間ではそれらの間に齟齬があって、どうにも納得いかないことが出てきたのです。すなわち、よく指摘されることではありますが、西欧近代的志向・価値と伝統的日本的それとのある意味での二重性が、ここでも問題として現われているのです。

生命倫理学なるものは、こうした問題性のまっただ中にあります。近代西欧の達成しもたらした科学技術としての医療でありますが、その運営の主体であり、参加・構成者である人間はと言いますと、西欧の、(思惟する我の外延としての)身体、(環境としての)自然、(そもそも個的存在であり、合理性がその基本的要件であり、権利・要求権を備えている社会的単位としての)個人、(公共の議論による)政策・意思の決定過程など、若干の枠組みを考えただけでも、人間的諸条件については、日本人のそれらとだいぶ異なっているのではないかと思われます。実際、日本は脳死を人の死を判定する基準として採用していないことでは、先進国の中で際だっています。

一つ例を挙げてみます。私はつい先日、(首都の)ワシントンでの日本・ドイツ・アメリカの3国の生命倫理学者の協議に参加してまいりました。そこでの主題は「(重大な医療措置についての)事前の指示」(advance directives)でした。いわゆるリヴィング・ウィル(末期医療に対して与える自己の指示:普通の遺言(will)と異なって、生前または死にゆく過程で遵守・実施を望むことがらを明文化したもの)については、ご存じかと思いますが、この「事前指示」は、それをさらに拡張して、一般の医療についても、患者の意思を明示し、それに医療側が従うことを求めようというのであります。明らかに個人の意思の尊重と言いますか、自己決定・自律をいっそう重んじる方向で医療を条件づけていこうとする努力であります。そしてこれは一連の人間観・自然観や技術社会・大衆社会状況などと密接に繋がりあっているのです。

現代の日本では、医学はほぼアメリカ的な思考・方法で運営されていますし、医療経済や、法律なども、欧米的な発想で組み立てられているところが多くあるようです。しかし、人間の心意や行為のありかたにおいて何が善であるか、その善をいかに実現するのか、つまり倫理の次元になりますと、日本人は現代アメリカが代表するような方向に乗っているわけでは必ずしもありませんし、言うまでもなくそれがただちに悪いことでも善いことでもありません。しかし日本人も、科学技術化した医療と現代の社会のあり方などが提示している問題状況には、確かに直面しているのです。

上で述べたことは生命倫理学における例に過ぎませんが、その問題状況は、私の見方では、日本の大学教育にも大いに関わっていると考えられます。管見に過ぎませんが、大学の直面している問題状況に焦点をあててみましょう。一

つは大衆社会状況、もう一つは人間学の分解もしくは困難であり、それらが相互に絡み合っていることは申すまでもありません。

［大衆社会状況にさらされる大学］

一つは大衆社会状況であります。

ここに持って参りましたのは、ワシントンの空港で買った、売り出されたばかりの今年度用のアメリカの主要大学を順位づけた雑誌です。学生は皆これを買い求めまして、今から5月位までが大学へ志願する時期ですが、どこの大学に入ろうかと考えるのです。ちょうど、ある商品を買うときに参考にするConsumer Reports（商品の質などについてテストし比較した結果を公表する雑誌）のようですが、実際、アメリカの学生にとっては4年間の時間と労力ならびに何万ドルかの費用を投資する、つまり大きな買物をするという発想で大学にも臨むのです。そこで、自分の行きたい、行けそうな大学について、その大学の学問的評判、入学生の全国試験での得点の範囲、教員数と学生数の比、教員の間での学位取得者数、開設学科、さらに男女学生比・人種構成、教育科目への予算などのほかに、卒業生の満足度や就職状況などを、学費などとともに注意深く考え合わせるのです。

この背景には、市民権の拡張と言ってもよいのでしょう、大学進学がごく普通のことになりましたが、それと同時に、技術の進歩で中級以下の事務・作業などが機械にとって代わられたり途上国に移動するなどの、産業構造の変化もあり、大学を出ても社会の中でのエリートにならないばかりか、仕事も無いというような状況が普通になってきたことがあります。これは重大な問題でして、アメリカの大学卒業生の３０％が職にありつけないか、または大学卒としてはどうかというような職業、大学で学んだことが一切役に立たないような仕事に就かざるをえない、という事態になっています。（資格や能力が十分に活用されない underutilizedということがしばしばあり、また、この仕事にはあなたのような資格は不要overqualified だからお断りしますと言われることが求職者の心配になっています。）従って、専門職に就くためにはさらに大学院に行くというのが常識となってきていますし、実際女性も実に多くの人が大学院に進んで学位を取得しています。（当然のことながら、大学院修了者の間でも競争が激化しており、たとえばPhDなどの学位をもっていても失業している人、運転手などになっている人も、出ているわけです。）この状態に関しては楽観論はなく、将来ともに好転するという兆しはありません。アメリカは雇用創出のために躍起になって、市場をさらに開放せよなど、日本にもいろいろな形で圧力をかけているのですが、専門家たちが指摘するとおり、大勢を変えることはないでしょう。なんのために大学に進学するのかは、これも戦争用語として厭わしい言葉ですが、人生のストラテジー（戦略）の一環として、実用主義的・

功利的にも、しんけんに考えられるのです。

日本では大学進学は、とりわけ女性にとっては、肩書としてか、世間体のためとか、厳しい「実社会」に出るまでの緩衝装置として、考えられているかもしれません。（もっとも外国人の眼はきつくて「４年間の遊園地」などと日本の大学を呼んでいます。）いずれにしても、古来からの習俗にある通過儀礼(rite of passage）として、ある程度の社会化を遂げるためのイニシエイション（入会儀礼）という考えが伏流として働いているのかもしれません。（アメリカなどでは right of passage で、「権利」の一部としての大学教育と考えるのです。）

こうした状況の中で、アメリカの高等教育・大学は歴史始まって以来の転換期にさしかかっているのだという認識が教育者の間で広がっています。おそらく誇張ではないでしょうし、１０〜１５年を経ると日本でも真剣な問題となって来るでしょう。これをさらに２つの面から見ておきましょう。ひとつは、経営の視点であり、もう一つは大衆社会との関わりというか摺り合わせの問題です。

［経営という視点］

現在のアメリカの大学では、経営論的な用語が多く投げ交わされています。２０世紀最後の１０年間は今まで増加・肥大してきた大学の「切り詰め」(retrenchment)の時代である。規模縮小を図る(downsizing)、構造を抜本的に改編(restructuring)して重複を避け、無くても済ませられるものは削るなどが、大学人一般のことばになってきています。それから、生産性(productivity)。つまり、どれだけ少ない教員でどれだけよい教育ができるか、ということですが、学生定員を増やしすぎると学生や父母から直ちに抗議の手紙が来る、コストに対してベネフィットが少ないではないか、と。そこで、教員の教科目数、教室外での指導の量などをめぐって、厳しい鬩ぎ合いがあります。売れない学科を切り詰めるまたは統廃合する、老齢教員の早期退職を奨励して若い人に置き換えて大学としての機動性・生産性を高めることなども、当り前の手法になってきました。（アメリカでは勤続年数とともに教員の給料が上がってゆくという仕組みはありません。もうひとつ、日本の大学教員が恐れるかもしれないのは教員の「自由化」で、分野によっては、外国人教員と競合するようになるのではないでしょうか。）

また、「生産物」(product）である学生が、どれほど良い職（社会的な認知度が高い専門職や管理職）に就いて、従って後の卒業生に有利になり、また大学にも寄金をしてくれるようになるか。（ほとんどの大学が卒業生やその両親らの永続的寄付金に頼っています。卒業生の満足度が低かったり、この大学はもうだめだという評判が立てば、寄付金は大幅に減って経営危機に陥ります。

奨学金で優秀な学生を釣る一方、大型の寄金をしてくれそうな保護者の子をある範囲内で受け入れることもします。）そこで、有望・優秀な学生を集めることにどの大学でも躍起になって、ＰＲの専門家を雇ったりしますし、またそれらの学生たちのほうでもよりよい奨学金を求めて大学と交渉したり駆引きすることも日常化しています。（また教師にも寄付金や委託研究費などを集める能力が期待されることもあります。）大学の社会的地位を保ってゆくためには、暗記力や標準化された「学力」だけで学生を採っていてよいのか。本格的なリクルーティングが日本でも求められるようになるのではないでしょうか。共学の大学のほうが一般的には有望だと考えられていますが、どのように良い男子学生を集めるかは、これから重要な課題になってくるでしょう。

このように経営の要素が大きくなってきて、今や学長や学部長などのポストには４０代の有能な人が就いていることはしばしば見聞きするところです。日本社会のさまざまの機関の中でもひときわ古い体質をもっているかもしれない大学のことですから、こうした経営の視点にどのように対処していくのか、考えてゆかなければならないでしょう。

［大学の社会適合性］

もう一つは、経営論的な次元ではなく大衆社会状況における大学の社会性を問うもので、責任(accountability)の概念です。医師・弁護士や管理職などに問われる（社会的）責任ですが、大学教師などにも向けられています。元来は、神の前で宣言 professし、社会もそれとしてある権威・権限を委任してきた職業である、医師・法律家、それに大学教授たちが専門人professionals だったのでした。それが近代では、その大方が自分たちの仲間うちのみの評価によってそれぞれの職業を営み、仲間うちの倫理綱領にのみ束縛されるようになってしまいました。さらに、古来からの伝統的価値（宗教や道徳、習俗、家庭）が力を失い、続いて近現代の国家主義や大イデオロギーも信頼されなくなる一方で、学問も、自然科学に倣う価値中立性、専門への自己限定を唱えつつ、細分化して学問全体を展望することができなくなっていますから、一個の専門分野であると権利主張する知的営為のどれがどんな意味をもつのかも、そうしたことを職業とするものにさえ、知的にはなかなか弁明できなくなっています。自らの知識・技術を誇るが、魂のない専門家が増えてゆくだろうとのM. ウェーバーの予言は事実と化してもう古く、「知識人」はすでに消えてしまい、ルネッサンス人は、もはや幸福な時代の夢でしかない。Universityのもっていたwholeの意味は事実として失われ、さまざまの専門家が並列に競合しあいつつ束ねられ経営される集合体multiversityになってしまった。この状況は教育にも当然大きな影を投げかけています。自分の専門の知識・技術しか知らないものは、その専門の人間的または普遍的 universal意味を語り得るのか、ことばの真の

意味で「知的誠実」を実現しうるのか。

大学人のそうした知的蛸壷化・倫理的無関心という問題状況もあって、一般人がそうした専門家たちに一般社会に対する責任を問うということになってきたのです。（生命倫理学を導き出した問題意識と同様です。）これは一般社会からの関心のレヴェルで申しますと、たとえば、大学は社会に対して申し訳がきくような教育をしているのか、教育の質は向上しているのか、ということになります。日本でも同じですが、学費は毎年のように上げられてきまして、７０年代以降上がりっぱなしですが、その間アメリカの一般民衆の生活水準は必ずしも上がっておらず、中流層が苦しんでいます。それでは、大学はコストに見合うどれほどのベネフィットを与えるのか、社会から遊離していてよいのか、と言うのです。結局、先に述べたと同列の、「消費者」・顧客の視点からの試験にかけられるわけです。

たとえば、学生によるコースと教員の評価も、時にはコースや学科などの運営に影響をもちます。アメリカの大きな大学ではどこも学生の委員会が編集したコースごとの評定を細かに記載した本があり、期待される知識を十分に与えてくれるか、講義はうまく組み立てられているか、教師は質問等にどのように応じているか、などを列記して評価しています。学生たちは履修登録に際してこの情報も大いに参考にしているのです。（私自身は学生の評価が第一だなどとは考えてはおらず、それも市場経済ではいたしかたの無いことかと思っています。ただし、一方で、［生命倫理学でよく引きあいに出されるアメリカの病院での同僚たちによる点検評価委員会の例はさておき、また官僚らによる往往にして点数化した評価なども望みませんが］日本の大学の現状のように、どんなに杜撰な講義を繰り返していても誰の批判も受けないという、ほぼ完全な専制で構わないとは思いませんし、他方、学生との対話性は教育的にも［ある程度制度的にも］作っていかなくては、と考えます。）

目ざましい研究で大学の名を高からしめ、研究費や寄金を招きよせる、そんな研究者も大学にとっては要るのですが、教員であるものは学生に人気があり、彼のコースはたいへん良いものであることを説得的に示せなければなりません。（時には、教員の採用にあたって、学生代表を考査委員会に加えたり、教員応募者に実際に学生たちを含む聴衆に講演させたりして、判断の資料にすることもあります。）クラスの最初の時間には講義内容などを週ごとに記したシラバスを配布し、十分に練った講義でショッピング（新学期開講後の履修登録までの１週間から１０日ほど学生があちこちのコースに実際参加してみて履修するか否か――購入するかどうか――を決める手がかりにする）に来る学生を引きつけようとします。

一流大学はさておき、それ以下の大学が職業訓練のための専門学校に近づいてきているのは、こうした潮流のなかでは当然と言ってもいいでしょう。かつ

てのリベラル・アーツの大学が今や、よく売れそうな（marketable）知識やノウハウの伝授を専門とする専攻分野を開くようになりました。なかには葬式産業専攻などというのもあります。こうして大学はいまやサービス産業の一つとして位置づけられ、自らもその方向に沿うよう努力してもいるのです。

日本でも、極端な資産インフレ（バブル）が崩壊し、製造業が海外に移転し、かつて人手不足を叫んだ企業が今ではリストラと称して雇用を縮小する事態となるなど、日本の産業構造が大変な歴史的転換期にさしかかっております。そこで学生や親たちが周章狼狽して、「売れる」・「潰しが利く」学科、資格・免許に結びつく学科、などに流れることも火を見るより明らかです。女子教育と言えどもこれまでのお稽古ごとを拡大したもの、ファッショナブルな（「国際感覚」のある、など）ちょっと欧米の文化に触れてみるようなもの、では済まされないはずです。もう一度、大学の存在意義が問われているのでしょう。

この状況は、外部社会の動態を今は考慮からはずして、大学自体のこととして考えますと、大学自体が（「超越」の次元を抹消した）世俗社会において大衆化したこと、学問が技術化・専門化したことの一つの結果と言えましょう。学問と大学と社会との関わりは、決して経営論的にのみ評価・判断されるべきことではありませんし、他方、今世紀の技術社会のもたらした諸問題の深刻さを考えれば大学・学問の中立などと言って済ませることもできません。社会から accountableとされるのは致し方のないことですが、学問・教育に与るものや大学は、（私自身は大学という制度・組織に期待することはあまりできませんが）、自らそれなりに答を用意しなければならない(responsible)でしょう。そうした主体的実践の過程を敢えて倫理 ethics と呼んでおきます。

[「なにを」から「どのように」へ: 教育の倫理?]

どうやら私は、本来の「自由なる人にふさわしい学芸」(liberal arts)を心がけてきた教師である先生方たちには、かなり悲観的としか聞こえない展望を語っているようです。しかし、ここで私自身も自問自答してきたこの問題について、いささか希望らしきことを述べさせていただきます。

まず、お手元にお持ちの複写物（America's Best Colleges（U.S.News & World Report, 1994), p.8）を一瞥していただきたいのです。（注）。その一節には、「結局のところ、（大学教育などというものに）時間とエネルギーとお金を投資すべきか否かなどと迷っているものにも、やはりそうしようと選択させるに至ることどもはと言えば、さまざまの掴むにも形のないことがらなのである。たとえば、新しい友人、自己発見、そして何にもまして人生の中ごろにも老いても持ちこたえてゆくであろう知的な成長、である。」そんな期待が、就職が困難になってきても、割に合わなくても――かつてのように大学に投資

した分の元を取り返すことはもはや必ずしもできなくなってもーー若者たちが大学進学を願う理由なのだ、とあります。この雑誌全体は実に大衆（大学進学希望者とその父母たち）むけと言ってもよいものですが、ここは肯綮に中っていると言ってもよいのではないでしょうか。時代状況がいかようであれ（そしてある次元ではどの時代も悪を孕んでいると言えるのでしょうが）、青年たちは未知の世界を切り開いて行く人人、未来を生きて行く人人であり、教師はその人間のもっとも人間的な探求に自らも与っていくのです。現代のように技術と技術的心意が体制となり、人間はそれに奉仕し依存する一方、それに管理される時代にあって、人間生活や世界の意味についてますます展望が得られにくい時代にあって、大学は模索し探求する人間(homo quaerens)にとって、知的にも人間化という点でも重要な役割を失うことはないはずです。

時には物質的な成功を何より追求する風潮があり、また時にはコンピューターのような新しい技術などが多くの人々を魅了することもあります。１０年前には環境倫理学などというものはありませんでした。２０年前には生命倫理学などというものを聞いたことのある人は稀でした。一時期アメリカでは、女子にも経営学専攻が流行ったことがあり、二流の大学でもビジネススクールが開かれましたが、今やそれらの多くが縮小または閉鎖の憂目にあっています。現代は専攻分野(discipline)であるとか、専門家であるとかいうことが、ほとんど強迫観念になっています。「専門」はそうした「時代の要求」に応えるべく、次々と生まれては古び、変化し続けてゆくでしょう。しかし、人がさらなる人間化をめざす青年期特有の意味は残り続けるはずです。

（さきほど、専門家としての訓練は大学院でということが普通のことになってきていると申しましたが、日本ではまだそうした考え方は定着していないので、専門教育を学部段階で求めるということがこれからも続くのではないでしょうか。また、専門の自治・独立を重視するという理由からなのでしょうか、学部・学科が、日本のお役所のように、縦割りになっていて、１８歳の入学時に決定してしまうと後はなかなか転進が難しくなります。これも知的とともに倫理的な問題だと思います。アメリカの大学では、学部はliberal artsまたは、arts and sciences であって最初から文学部国文学科とか、工学部電子工学科などと分かれているのではありません。日本ではＩ．Ｃ．Ｕ．がアメリカ型ですが、あとは東大などの一部の国立大学の教養部が学生に入学後の専攻選択の余地を残しているほかは、転科・転部には障壁が設けてあるところがほとんどです。これは、消費者意識が向上(?) すれば、大いに批判されることになるでしょう。）

Liberal Arts、人間学的な関心は、これからも健在と言えるでしょうか。今のままでよいのでしょうか。（もちろん、中世以来の人間教育などというものをやっていればよいとは誰も思わないはずです。）

最近のアメリカの一流の大学では、「基本に帰る」こと、3Ｒ(reading, writing,

arithmetic)をきっちり習得してあることが、求められています。大学の一年生が履修する Freshman English などは相当にきつい科目で、国語（英語）がよくできませんと、補強するためのコースを履修することを要求されます。ラテン語も一部の大学ではもどってまいりましたし、倫理を必修基本科目にしているところもあります。（一流大学では、と申しました。結局、大学教育、「自由な人にふさわしい学芸」というのは一部の人人のものだ、ということになるのでしょうか？　もちろん過去の時代とはちがって、固定した階級などのない社会においてではありますけれども。）すなわち、知識・情報などはますます多様になりますが、そうした知識への対応と申しますか、多様・膨大な知識を噛み砕き整理し位置づけることのできる能力を養うこと、本来の知的修練が今や再び注目されていると言ってもいいのではないでしょうか。これが、もちろん今更私などがおこがましく申すまでもありませんが、「なにを」から「どのように」へと、我々の関心を拡げることを申したかったことの基本点であります。

そのためには、どうしたらよいのか。これもすでにこの大学ではすでに実践の蓄積があり赫赫たる成果を挙げていらっしゃるのですが、もう一度確認させてください。

大学教育の中心となるのは、今述べたことに係わるのですが、知的訓練の強化ということです。現代の知の地平によい展望をもてることは、もちろん重要ではありますが、それとともに、いやそれよりも大切なのは、そうしたくさぐさの知識・情報などを人間的・人格的に検討し組織できる能力ではないでしょうか。ごく平たく言いますと、大切なのは、学生一人一人の、より明晰な十分な、そしてよい理解と、より明晰な十分なそしてよい表現を発現させるための訓練です。

近代日本は「追いつけ、追いつけ」のかけ声で欧米伝来の知識をとにかく詰め込むことに力を注いできました。Educare（潜在的なものを引き出し発展させる）ではなく、instruere（積み上げる）が強調されすぎましたし（この点については、柳田国男が強い懸念を表わしておりました）、それに独特の家父長的権威主義＋温情主義（パターナリズム paternalism; 生命倫理学で医師のそれがさかんに問題にされている）が纏わりついて、一方的な教化に傾きがちでした。こちらの皆様は対話的関係を教育の主眼にしていらっしゃいますが、私は留学したてのころ、クラスで学生がよく質問し、それに教員がきちんと答えていること、高名な教授でも私どもの拙劣な小論文（いわゆるレポート）にコメントを付けて返して下さること、オフィスアワーを設けていて質問などに面談の上で答えてくださることなどに、びっくりしたことを今でも覚えています。これは、先に述べたようなサービス業的な受け答えを身につけているというのではありません。（そういう現代的な要素も無きにしもあらずですが。また、先ほども述べたとおり、教育に熱心であるか否かも絶えず評価されるとい

うこともあります。しかし、アメリカの大学教師は教育に相当の力を割いておりまして、教え方についても、研究会をもったりしています。）時により人により強弱があるにせよ、根底には、教育という＜こと＞は、そもそも「対話」であり、一人一人の顔が見えるような知的コミュニケイション（分かちあい）であるという（ソークラテース以来の）伝統があるのです。極端な言い方をしますと、日本の大学教師は、講師また「教授」（時には翻訳業）はしてきたかもしれないが教育者educatorとしては十分ではなかった、とさえ思われます。そしてそのゆえに大学が名前ばかりになってその実質であるはずの教育が等閑にされてきたのではないでしょうか。（佛教でも元来は対話・問答が重要でしたし、孔子の伝統でもたとえば『論語』述而7:8 に、「憤せずんば啓せず…」とあります。）

私が日本の大学で過ごした８年の間に、私の記憶では一度たりとも、提出したレポートが返されたことはありませんでしたし、ましてコメントをもらったことはありませんでした。私は日本の大学での８年間を残念に思います。そこで、日本に帰ってきて以来、できるだけ学生に語らせ、書かせ、それに応答しようと心がけているのですが、なかなかうまく進みません。学生数が多すぎること、学生が細切れの科目を多く履修しなければならず、どの科目も内容が薄いことなど、諸条件が異なっているからでもありますが、最大の問題はやはり、学生も教師も知的探求においては誰も等しくオープンであること、真摯であること（知的誠実）を尊重する、そうした伝統があるか、ということではないかと考えます。私には、教育の原点を忽せにしていては、民主的も何もないのでは、と思われますし、私の主張したい「教育の倫理」の意識さえ磨かれないのではないかと恐れます。

医療の現場では、告知、情報の開示、説明を理解したうえでの（ある治療法への）合意（インフォームド・コンセント）などが論議されてきました。一方的なパターナリスティック（家父長が「温情から」するように、一方的に患者の善を考えて治療法を決め実施してしまう傾向）な対し方ではなく、患者の自己決定を大切にすることが求められています。外部の検討に対して閉ざされた場（密室）で、弱者の立場にある人に専門の権威を振りかざし、十分に理解できないことをあたかもただ聴き入れればよいのだというふうに、処置しては、それが医師本人には最良の措置であると思えるにしても、よくないのだということです。病（人間的危機）は、むしろ人と人との人間的出会いの機会であり、人間的相互・信頼関係を通じてさらに人間化してゆく時でもある――そんなとらえ方ができないか、ということです。

同様の事が教育でも言えないでしょうか。専門的知識・技術のもっている分断と相対主義への危険に十分気づきながら、未来に生きる人人とともに知的誠実の開く地平を探求してゆくこと、その方法論が強く問われているのではないでしょうか。あたりまえのことですが、教育者はその専門的知識によって教育

者なのではありません。知的訓練の強化、知的誠実の尊敬、そうして知の共同体を学生を含めてともに構成してゆくことは、「教育の倫理」的課題でもあるのです。

教育の倫理などと申しましても、単に、教師が無断で遅刻したり休講したりしない（アメリカの大学では原則として休講はしません）、差別やひいき（性的ないやがらせ）をしない（アメリカの大学では学生からの苦情があれば第三者機関を設けて審判します。日本ではどこに行けばいいのでしょう）、（これは実際に最近あったことですが）自分の著した教科書のみを参照物として試験において許し、ほかは（彼の教科書の複写も含めて！）許さない、というようなことはしない、（次はもっと深刻な問題で焦眉の課題でもあるはずですが）女性教員の数を増やすべきである、日本的な人間（うち－そと、師弟）関係を前提として個々の教員の常識・「良識」に任されることの多い教務その他に関しての教員の裁量権などは十分に検討することが望ましい（そうした論議を深めれば、教育的なることの意識が高まる）、などと今ここで論じることはしません。（これらや更にほかの「倫理的」問題は決して軽視されてよいものではありませんが。）いわんや「衿を正す」式の外面的な謹厳を求めているのでもありません。そうではなくて、単なる知識・技術の伝授ではない、教育の独特の位置と意味を大学教員が探求しつづける実践を、指します。倫理を、原理や教訓の集合として把握するよりは、実践過程と考えております。

時間の関係もあるので私の考えていることを二、三手短かにお話しておきますが、ほとんど皆様のご存じことにほかなりません。こうしたことの再把握がどのように有意義なのかは先生方のご批判を乞うところであります。

一つには、徹底して対話的な方法によること、ですが、これはここの先生方には釈迦に説法です。日本の教師はとにかく権威主義的でした。（この対話的方法は、他面でコースを明らかにしておくことを要求します。コースの細目（シラバスsyllabus）、課題(requirements)、要求水準、評価法などを明示して、学生がいわば世界の何処でも自分の取り組んだコースについて自分でも釈明できる(accountable) こと、また他からも認知されるようにしておくこと、そうした知的開け・明るみによって裏打ちしなければ、大学という場での対話も危うくなります。）

二つには、女性のための教育です。これも皆様の方が私より進んでいらっしゃるので必要ありませんが、私の所属している大学では本格的に取り組まれたことはありません。女子大が危機にあることはご存じのとおりですが、それでも Wellsley, Bryn Mawr, Smith, Mt.Holyoke など生き残ってゆく大学があります。そこでは女子が、男子がいないだけに、自分たちなりに指導力・組織法などを発達させ、自然科学・数学などでも成績が伸びるということが発見されていますし、社会に出てからもリーダーシップを発揮することが知られてい

ます。従来の大学では教科の組み立てにおいても教員の意識においても男子本位の考え方が強かったのですが、共学の中でも、女性が十分にその人間的な力を発展させることができるようなプログラムが必要でありましょう。（上に挙げた大学はそれぞれ学生数では小さいのですが、理科系の学科をもっています。Liberal Artsの大学はみな理工学系を多少なりとも持っているのです。）（また、女子学生に人気のありそうな専攻としてマス・コミュニケイション関連を売りものにするというようなこともありましたが、これは失敗でした。この分野は特殊で、誰でもが向いているわけではないし、そもそも多くを雇う職種ではありません。経営学にしても同様の誤算でした。ミーハー的人気に迎合すべきではないということです。女子にとって有望なのは、恒常的ですが、アメリカでも、教育関連、医療看護関連、それに公務員などのようです。）

ここに持ってきたのは、エマニュエル・カレッジというボストン郊外の小さなカトリックの女子大の履修案内です。１９１９年の創立、学生数が７５２名で、それに聴講生（特定のコースのみを履修する）が４７６名で、学生の学力からすると中の上ぐらいです。ここでも文学部的科目のほかに、化学や生物学とかがありまして、それらを取ったあとで、看護関連、福祉関連、障害児教育などのコースが用意されています。もうひとつは、私が非常勤講師をしている神戸女学院の履修案内です。日本の私立の女子大で理科系をもっているのは、東京女子大と津田塾が数学、日本女子大が生物系物理系など、武庫川女子大が薬学、など多くありませんが、神戸女学院は人間科学部を設け、環境科学と行動科学を専攻分野として提供しています。日本でもいろいろな工夫が始まりつつあるというところでしょうか。

三つには、いま述べたことと関連しますが、南山は全体として私大文系という枠組みに入ってしまっているのですが、これは学生にとって幸いなのか。自然科学・工学の多少なりともないキャンパスは健全でありうるか。現代の我々の学園から、知の地平から、理工系を除いてしまうのは恐ろしいことではないでしょうか。これは巨大で厄介な問題です。直ちに理工系を設立できなくても、なんらかの工夫が必要だと考えますが、ここではこれ以上立ち入りません。

四つには、ヴォランティア活動であります。社会との交流ということでもありますが、分断化・断片化されている現代に人間として生きる我々の人間学にとっては欠くことのできない学びの機会としてヴォランティア活動があると考えます。大学におけるさまざまの「専門分野」のもっている知的ゲーム的性格、その相対主義もしくはニヒリズムを超える視点に到達する一助として、学問の意味をとらえかえす場として、学生が生活世界の広がりのなかで人生の多様な（危機的な）次元に出会う契機として、自発的連帯の行為に参加することはこの上もなく大切でしょう。これを教育のなかに有機的に位置づけてゆくことがこれからの課題ですが、これも皆様のところではすでに実践しておられて経験の蓄積も豊かでいらっしゃるので、これ以上申す必要はありません。

五つには、近隣の大学と大学連合(consortium) を組んで、また国内・国外留学を認めて、一定限度内での単位互換を基礎にして、お互いを補いあうこともあってもいいと思います。また、短期大学と四年制の大学が、まるで別の路線であるとか（再びアメリカの例ですが、コミュニティ・カレッジを終了するもののほぼ8割以上がその後四年制大学に進んでいます)、大学院にも自分の学部出身者しか採らないなどというのは、教育の倫理からは弁護しがたいはずです。(プリンストン大学では、学部卒業者で大学院を目指すものは他大学に応募し、いわば他流試合を経験しなければなりません。) 学部・学科を入学時から決定してしまうというのは問題だと先ほど申しました。副専攻を許すばかりか奨励することなども真剣に考えるべきだと思います。そうして大学のオープンネスを推し進めなければ、教育の倫理も実現しようがありません。(現在の日本の大学の学部教育の「専門」へのなだれ込みは、大学教育の内側からの腐蝕をさらに激化するだろうと思います。)

これらは、学生を教育というもっとも人間的（共存在的）ないとなみのパートナーとして正当に考えるとしたら、教師も共参加者であると考えるなら、(そして少なくとも人文学・人間学では教育こそがその本質的構成要素となっているはずですが)、現在の大学制度にすっかり依拠して、または大学教員本位で、組み立てられている大学のあり方を根底から変えてゆくために必要なことだと考えます。

以上、私がもっとも関心を寄せていることを臆面もなく申させていただきました。(教育の倫理という点については、先の南山学会で一部を報告しました。)

南山短大も南山大学も、いくつかの特徴といいますか、限定をもっています。一つは信仰の開く次元に深い関心をもっていますが、これは大切な、受け継ぎ維持・成長させてゆくべき、「資産」でもありますが、激しい世俗化・相対主義化の嵐のなかで、ますます試されてゆくはずです。二つには、私立文系という枠組み。これについては上で少しだけ触れました。そして三つめは、女子短大または女子が主流の四大という特徴。いずれも弱点にもなりえますが、また特長でもあるために、なかなか複雑です。

今日は、浅薄なトレンド・ウォッチャーを若干勤め、他方、教育の倫理という、これもおこがましいことを述べさせていただきました。お聞きいただきまして、恥じいりながらも深く感謝いたします。

（注）この雑誌が、ある調査の結果として挙げている、進学希望者が大学を選ぶ際の優先事項は、良質の教育など一般的に理解できることであるが、男子と

女子との差異が参考になる。男子学生は、1.名声(prestige)、2.理学・工学、3.コンピューターと情報工学、4.運動競技、5.社交親睦、を優先事項として挙げるが、女子学生は、1.国際的アプローチ、2.共同体として感じられること、3.教養(liberal arts)志向、4.安全、5.リーダーシップの機会、6.一緒にやってゆける仲間の学生たち、7.学園の雰囲気、を大切にしている。(ちなみにアメリカの大学では学生たちは基本的にはキャンパスの寄宿舎に住まうことを考慮する必要がある。)

大森：どうもありがとうございました。アメリカの大学の状況というか、何か不気味なというか、あるいはそれを我々に適用されたら幾人がここで生き延びれるかという思いに駆られるお話からはじめていただきました。南短の外から眺めたとおっしゃいましたけれども、現状、問題点を含め、そして大学での教育とはどうあるべきなのかという様なことについて、色々資料とか、それから示唆に富んだお話をしていただいたわけですけれども。どういたしましょうか・・

土田：もう一つだけ補わせてください。最後に言及したことの続きですが、短大ということについてです。アメリカでは普通junior collegeとか、community college というのがありますが、たいへん繁盛しています。後者はとくに、現在までの日本の短大とは、趣旨も異なっていますが、なぜ盛んなのか、その理由について見聞したところを申しますと以下のようです。

一つには、先進諸国では中間層の仕事が、事務系でも技術系でも少なくなってきました。コンピューターが代わってしてしまいますし、または中国やインドネシアとかに移されてしまいました。従って、すごく優秀な人は有名大学に進んで専門職に就くとか高位の官僚になるとかするのでしょうが、その一方、普通の人には厳しい状況になっています。こうして階層分化が起きているのですが、もし、ちょっとした技術や知識、また資格などを必要とする仕事に就きたいというばあいには、2年制の学校がそんな目的に適合しているのです。Community college なら小回りが利いて現在の需要に応じられるし、たとえばコンピューター言語など、現在の技術水準の習得などが可能になる。教えられる人を連れてきて講師とすればよい。2年間で一応の事を習得したらすぐに会社に入ってそこでさらに習っていった方がよい。また、看護関連も安定した需要があってこうした学校で人気のある専攻分野です。

第二に、短大の経営は四大に比べて遥かに経費が少なくて済む。図書館だとか、運動施設だとか、大学に要求されるものが無くてもよいので、資金力が少なくて済むのです。

第三に、こうした学校に学ぶもののほぼ8割以上がその後四年制大学に編入しているということです。まず、2年やってみてさらに学びたければ大学の3

年生に接続すればよい。日本でも、大卒というのが単なる肩書としてはあまり意味を持たなくなり、大学教育の実質を求めるということになれば、やがて同じようになるのでしょう。

さらにもう一つ。ここにあるのは、The Christian Science Monitor という新聞に最近載った記事の切抜きですが、大学の教師たちが教え方について開いている勉強会についてのリポートです。ここにグラフがありますが、学費は年々上がってゆくが、教育の質は向上しているのかを厳しく問うています。それに応じる一つのデモンストレイションでもあるのですが、教科ごとに教師たちがあちこちで、教授法の研究集会を開いているというわけです。

大森：それでは、今のお話を聴いて皆さんの方でいろいろとご質問があるかも知れませんし、お考えになっていることがあるかも知れません。又私たちが置かれているこの状況ということから考えまして、感想でもなんでもいいんですけれども。そういうお話をして頂きながら、なるべく今我々が直面しているような所で少しお話をまとめていくというような方向にしたいと思いますので、ご自由に発言して頂きたいと思います。

津村：それは具体的にどこの大学が作っているんですか？

土田：上の例では、すでに教職にある教授とか助教授とかが自主的に（もちろんどこかから出張費やグラントを貰っているはずですが）集まっているのです。これから教員や教務助手などになろうとするものには、教え方の実際を指導してくれる大学もあります。ハーヴァードにもあります。そこでは模擬で教えさせられて、ヴィデオに撮られるのです。それを見ながら批評されるのです。学生に対しての身体の角度が悪いとか、板書がだめだとか、声が通らないとか、要点がクリアになっていない、いや要点が多すぎてダメだとか、一つの講義５０分では要点は二つまでにしておけとか、そんなことをずけずけ言われるのです。日本ではそういう事がまるでないので有難いとも言えるし、困ることもあるというわけです。

津村：大学の教員には教育実習なんて無いですものね。

土田：ないですね。本当はなければいけないんでしょうね。教育をきちんと実践してこなかったからではないでしょうか。

竹内:教育という観念自体がないんじゃないかと思うんです。

土田：本当にそうかもしれませんね。

伊藤:教育というのは高校までのレベルの話で、大学は違うというのが日本のこれまでの考え方だと思うのですが。

土田:高校まででも、結局、これが大切だと先生が言うことをそのまま呑込んだ生徒がよしとされますね。アメリカの初等・中等教育でいちばん目につくのは、What do you think?とかWhat is your opinion? というようなことを実にしばしば教師が尋ねますね。自分なりに考えるということが求められ、そ

こで活発なディスカッションがあり、それを通して学生たちが自己の思考の経路を鍛えてゆくということが教育の基本であるようです。

柳田国男にすっかり同調しているわけではありませんが、聴くべき大切なことも言っています。彼は戦中から戦後にかけてさかんに日本の教育について発言しました。そのポイントを挙げておきますと、日本では明治以来、上から読み書きを通して訓育をしてきたが、子どもたちがよく聞きよく話すという教育をいっさいしてこなかった、ということで、これを繰り返し言っています。戦後になりますと、人前で自分の意見を誰にも分かるかたちで話す教育をしてこなかったことも、悲惨な戦争にまで至ってしまった原因のひとつではないか、と言います。戦後の一時期、彼はさまざまの教育者を成城の自宅に招いたりして、教育に積極的に関わっていきました。そこで彼が強調したのは、一つがいま述べた、言い・語るという教育。もう一つは郷土教育。社会科でも自分の身の回りから始めて郷土の地理・歴史を学び、だんだん世界へと及ぼしてゆくべきだと言うんです。ところが当時の進歩的な教育者たちも、この柳田の方法を採らなかったようです。そうではなくて進歩的な知識を教えこむのです。デモクラシーとはなにかとか。デモクラシーの内実を培わないで戦後教育は進んでいったようなところがある。これはたいへん根が深い問題で、こうして日本の学校で「よい子」に納まりかえった学生たち、そしてその中でももっとも忠実に教師のコピーとして大学の先生になったような人々は、なかなか education という共参加のいとなみにはなじまないのではないか。そうした点で、日本の諸学のなかでも、人文学というか人間学の分野などでは特に遅れてしまっているということがあるのではないか、と思います。

大森：どうでしょうか、ご意見とかご質問とか、その他ありましたらどうぞおっしゃって下さい。

津村：先ほどのようなことが本当にサポートされるのは、卒業生の寄付によってですね。卒業生に対して提供している物はたくさんあるから寄付があるのですか？それとも何もなくても寄付はされるのですか？

土田：母校からは卒業生に毎年ニューズレターが送られてきます。大学の近況、それから同窓生たちの消息などです。全国、全世界に散らばっている卒業生のことが知れるのです。だから卒業後もずっとコミュニティが続いていくという感じがあります。どうやら母校に対する愛というのは、私などが自分の日本での学校にあまり持っていないのとは違って、ずいぶんあるようです。そうしたニューズレターには母校への寄付金の小切手を送る封筒も付いてくるのです。ニューズレターの最後には、寄付をしてくれた人々の名前が載せられてもいます。

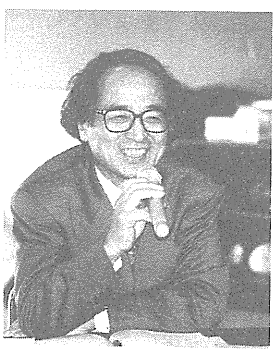
津村：そういう意味では、一年に一回かletterくらいですか？そうすると南短などのように、大学としては会報を送っているという点で余り変わらないですね。それに、講演会とか友の会でこんな催し物がありますというようなことは

言ってますよね。それとやっぱり教育の中身というか、2年間なら2年間。4年間なら4年間の中に、その期間にidentityが生まれるような教育が実際にはされているかどうかという事ですね。

土田：本当にいい教育を受けたんだと。gloriousな、すばらしい青年期を持ったんだと、そういう印象じゃないでしょうか。それを持ってもらえなかったら大学教育の負けだということだろうと思うんです。いろんな破天荒なこともアメリカの学生はしますけれども、でもあのloyaltyという概念は我々日本人にはちょっとわからないんです。私、国立大学出身なもんですから、loyaltyの意思まるでないんです。けれどもアメリカ人の学生はloyaltyというのを持っているようですね。文化の違いでしょうか。

伊藤：ただ愛校心ということだけじゃなくて、受けた教育を何かの形で社会に返していかなけれないけないという考え方は今おっしゃった日本の愛校心とちょっと性質が違いますが、返すのが当然だと思っているようですね。だからお金で返さなくても何かの形でサービスをしなければいけない、そういうことがたたき込まれるような感じはするんですけれども。

土田：ボランティアがカタカナ語でしかないということの背景にも関わっていると思うんです。ずいぶん違うと思うのは、私が受けた恩顧は、直接にお金でもって一対一のように返すものではない、私が他の人に返してもいい、全体として帳尻が合えばいいんだという感覚があって、それがボランティア精神みたいなものを裏から支えていると思うんです。その辺が日本のいわゆる封建時代からの忠誠心とは違うと思うんです。また入学時の、たとえばclass of 1985とかですね、そういうのは一生涯続いていく友好関係なんです。大学側が一つのセンターになって、同窓生が絶えず交流を図れるようになっているということも大切な事としてあるんじゃないでしょうか。我々にはそういうふうな事がなかったかもしれません。



星野：今のことで私思うんですけれども、私も自分の母校に対しては、同窓会にも行かないような感じで、なんていうのかな、教育を受けた、何か教えてもらったんだということはあるんですけれども、教育に参加したという感覚がまるでない。だから、ともに学んだ仲間として同窓生は横につながっています。一緒に参加した者として。ところが、やっぱりあくまで受け身で教えられた感覚でしかないもんだから、全くコミュニティとは考えられない。だから、アメリカがどうか詳しくは知りませんが、そこでは、一緒にそこで自分も生活をし、そして教育という一つのことに参加しているんだということが若い者なりに何か感じられるようなものがそこにあるような気がします。私はアメリカで一年半勉強させてもらったんですけれども、日本の大学にお金を出そうとは思わないけれども、向こうから毎年寄付金を求めてくるとなんか心がそそられるんですね、そちらの方が。自分が長いこと受けていた母校には全然一銭も出そうという気が起こらないのに。基本的にどこかで、mentalityといえばそうなのか

もしれませんが、社会の仕組みそのものもあるのですが、やっぱり一つ伝統的に日本の教育の姿が象徴されたような気がするんですけれどもね。

土田：私は一度も寄付したことはないんです。ハーヴァードなんていうのはbig corporationですから。あんなのに寄付してもしょうがないと思っているんですけれども。ただ大学の発生からして、政府の国策で、官僚養成と産業立国の為の技術者養成として始まった日本の大学と、学びの共同体として「国家」なるものに先行して始まった西洋の大学とは違いますよね。これはもう発生からして違うので、我々は今に至るまで、官僚養成校の東大をトップにしたミニ東大をみんなが目指しているような、そういう大学像を持っていますから、この大学像は、しかし変わらざるを得ないし、変えなくてはいけないと私は思います。participatoryといいますか、みんなが参加するという形にならざるを得ないと思います。ですから一方で、大衆社会化状況というものを恐れながら、他方で参加型へと、私も思っています。

大橋：先ほど先生のお話の中で、community collegeと短大と同じように、同列に置いてお話なさったようですけれども。community collegeにあっては、ある意味では実用的なそうしたものを重視していかなければならないだろうと、これはcommunity collegeのあり方でしょうけれども。私達の短大として、多くの短大が確かにおっしゃるように非常にコンピューターだとか、いわゆるいろんな実用的なものに力を入れようとしておりますが、その中にあって、私達は先生のおっしゃるliberal artsそういう教育というものを2年間の短い間の中で可能なのかどうか。またどのようにしたらいいのかという、そうした問題を先生はどのようにお考えになりますか？

土田：私は南山短大に対しては、ただただ尊敬の思いしかないと嘘偽りなく申しますけれども。神父様の前ですから。とか言って。実際に重要な問題は日本で短大が一つのdead endになるような枠組み、これだけはあってはならないと思うんです。どうやって変えていくことができるかわかりませんが、南山学園の場合には可能ではないか。学園として南山大学等は、単位互換とかにして、希望者は四大の方にも接続できるということにしない限りは、どんなにすばらしい人間教育をやってみても、それは彼女達に一つ大きな拘束を、条件を付けてしまうことになって、これはまずいだろうと思います。これは勿論南山短大の責任ではなくて、今まで日本では全てdead end。専門学校に行けば、専門学校どまり短大に行けば短大まで。というふうになってきたわけですけれども、これは何とかして変えていかなければいけないだろうと思うんです。さて、その上で、2年制の liberal arts の短大の今後ということになると、私にも予測がつきません。自己・他者・世界の理解と、教育年数と、必然の結びつきというのがあるのかどうか。（大学でも、学生たちが人格的成熟とか、人間・世界のよい・深い理解がありうるのだ、ということなどに気がついて来るのは、いまのところ、3、4年生になってからではないでしょうか。戦後の一般教養

が否定的に見られてきて今では捨てられようとしていますが、ひとつには従来の受験本位の高校教育の枠組みから自由になるのに時間がかかること、他方には勿論、教養教育の方法（と理念）にも問題があったのではないかと考えています。実に残念なことだと思います。南山短大のような小さな学校で協力関係のとてもよい優秀な教師たちが集まっているところは、やはり例外的です。小さいと言っても、アメリカの素晴らしい大学、そこを出て大きな大学の大学院などに進学するのですが、それらは一学年４００～５００人ぐらいのところが多いのです。規模は教育そのものに本質的に関わるところがあることは言うまでもありません。）

伊藤：今の大橋先生のご質問とつながってくるところがあると思われる点を伺いたいのです。お話の中で、確かに今の私達が抱えている問題はあるのですけれども、それとは別に先生は中でのさっきおっしゃった全人的な教育は今非常に難しくなってきていると思います。今、アメリカではliberal arts educationというのは再認識されるようになってきているというようなお話をなさったんですけれども、理想的なliberal arts educationはどんなものであるかのお話を伺えればなという気がします。或いは全人的教育と言いますか、こんなものが可能だとか伺えればと思います。もう少しキリスト教大学の可能性をクリスチャンであろうとすること自身が非常に難しい、今日の社会でどのような全人的な教育、或いはどんなliberal arts educationが可能かというような事を伺えればなと思います。

土田：たいへん困難である、と私には思われます。現代における知の状況を展望し吟味するという作業のなかで考えてゆかなくてはならない問題でもあるのではないでしょうか。２０世紀は人類史の中でもたいへん問題的な世紀でした。もっとも混乱していたとも、野蛮であったとも言われるような世紀にあって、もはや守るべき価値さえ明確ではない。この破壊・混乱の時代のあとにもう一度再生してくる人間像は、しかし、旧来のそれとはかなり違ったものになるのではないか、と私も思います。こんな当り前のようなことを敢えて言うのも、教育者としては、自分たちが拘束されているこの現代をなんとか全体として見ることができなければその意味も掴めないこと、未来に生きてゆく人人に何を伝えるべきかさえ分からないことを、つくづく思うからです。

現代の大学では、専門家が主流で、generalistは軽視されていますし、いわんや humanist であるというのは、たとえばアメリカなどでは（politically correct ではないと非難されることもあって）、言えなくなっているようです。人格的成熟だとか、自己・他者・世界のよい理解などということは、もはや個人的見解でしかなく、専門的な知識・技倆が優れていればよいので、害をなさないかぎり、その人格の教育者としての資質だとか経験だとかは問わない。今の大学人の構成はそのようになっています。そしてある個人の業績などというものは、専門家同士のごく内輪の評定に拠るだけで、専門外の人にはまるで判

断できないし、また専門外の判断は受けつけない。教育はこうしたかたちの評定になじまないものとして、評価の対象にならない。すなわち、大学のありかたは、一般的に言って、反倫理的ではありませんが、非倫理的（倫理の次元とは無関係な）です。そうだとすれば、全人的と言いますか、personであること、personalな次元を大切にするというのは、時流に反するとも言えます。専門のcompartmentに閉じ込もる人、テクノクラトのタイプ、マネジャーのタイプなどの人々が、現代のキャンパスでは大勢でありますが、この状況は今後とも変わらないでしょう。

そうした中で、なお人間学な展望が教育において大切だとするなら、ひとつの活路はおそらく南短がなさっているようなティームティーチングかと思います。（これにもサイズの問題が、従って採算・経営の問題が絡んできますが。）コースとしての統合性をなんとかして保ちながら、いろいろな視点・強調点、方法論・展望が、教師たちの相互信頼と相互批判によりながら、織り合わされてゆく。そんな知の（学びの）共同体を教師たちが作ってゆくことができたら…

もうひとつは、先ほども言いましたが、そしてこちらではすでに実践されていることですが、社会との交流を、たとえばヴォランティア活動などを教育の中に位置づけることによって、図っていく。しかし、私などが言うまでもなく、最終的にはやはり、教師ひとりひとりが批判的知の展開をどのように自分の課題としてゆくのかということでもあります。（知と愛との世界内現実化としての倫理性ととらえてもよい。）　知識・技術の現段階を考えたら、我々はルネッサンス人を、レオナルド・ダ・ヴィンチをもう一度連れて来ることはできない。教育においていかなる専門を主たる教科とするかも決して忽せにされてはならないけれども、知の地平をどのように歩むか、そしてその地平を人間としてどのように位置づけるか（超える次元がありうるか）、そうしたことを学生たちと探究してゆく、その工夫が大切ではないか、と思います。

中野：まだ話の全部が見えていないんですけれども。とりあえず言わせてもらえば、universityがmultiversityになっているという問題点の指摘ですけれども、日本ではさらにそれが総合大学という名に変換されて、学科や領域をどんどん増やして巨大化していくことだと誤解されているような印象が強くするんです。でもヨーロッパで始まったウニベルシタスuniversitasの理念は本来は違うと思うんです。教員と学生の共同組合がもともとの意味ですから。例えばこれは近代のことですが、フンボルトの大学の理念でいえば、教育と研究が一人の人格、ここではまずは教員のことですが、その人の中に統合化されてそれが学生と関わりながら共同研究が行われる場なんだというイメージが古典的なユニバーシティのイメージにはあると思うんですね。ところが、その一人の人間が教育と研究というものを同時に成立させるというのが、今、いわゆる専門化された学問教育の中で非常に難しくなってきている。とりわけ、土田さんがおっしゃったような、学生一人一人に対して、アメリカの話で紹介されたよう

なinside classでもoutside classでも非常に丁寧に対応しながら、同時に自分の研究とタイアップさせていくというのは、少なくとも日本の大学の中ではほとんどイメージできないんですね。それはどうしてなんでしょうか。

土田：ここに、アメリカの全国レヴェルでの優秀大学 best national universities の順位があります。ハーヴァードが１位になっていますが、そこでの学生対教員比が１２：１、１人の教員に対して学生が１２人。２位のプリンストンは８：１、スタンフォードが３位で１１：１です。（Liberal Arts Colleges では、１位の Amherstが９：１、以下、Williamsが９：１、Swarthmoreが８：１、Wellesley が１０：１、Pomonaが９：１など、この表にある２５位までの学校では８から１２（２５位のHoly Crossだけ）で、１学年が３００人から多いところでも６５０人です。）ずっと下の方の University of Dallas（第１００位）を見てみても１４：１です。日本はほとんどが３０：１以上です。（３０以下が５校。Ｉ．Ｃ．Ｕが１４、上智が２３、南山が２７で、あとは慶応２８、早稲田４７、青学５３、同志社５３、明治５７などなどです。平成４年度)。

ということは、日本の大学の教員は、アメリカなみの教育をめざすことはできない。マスプロ授業が行なわれているという根本的な問題を抱えています。ですから、理想論は言えても、本来の教育として実際にできることはたいへん限られてきます。それでも単なる専門家になってしまうのではなく、教育者としての任務を果たそうとすればどうすればよいのか。知的な精進を持続できなければ、クラスは生き生きとしたものにはならないことは、我々が経験から知っていることです。こちらが知的にvigorousでなければやはり学生にもそれが分かってしまう、彼らは言語化できなくても敏感に感じ取っている、そんな面があると思うのです。（日本の学生はいったん大学に進むとあまり学ぼうとしないことに教師の方でも助けられているというのでは、共謀になってしまいます。教育の倫理の根本にふれることにもなります。）孤独の思索・精進が教育の核心にあるのですが、こういう教育軽視の環境では、もうすぐ新学期が始まるということが、毎年ながら、実に怖ろしいことであります。

中野：今のお話を聞いていて、僕も学生に話をしたり、一緒に授業をやったりしていて、学生からこの人はなんて勉強してない人だろうと今日は感じているだろうなとか、やっぱり生身の人間の前に立っていますから、すごく強く感じる時があるんです。ところが、アメリカの話ですと、学生からどんどんフィードバックされるということですね。手紙だろうが、直接かもしれないし、或いはアンケートのような形で返ってきますよね。日本の場合、少なくとも僕が今持っているクラスは学生にしょっちゅう言うんですよ。思ったことを言って下さいと。それでも声がないからフィードバックの用紙を出して書いてもらいます。そこまですると少しは返ってきます。一番いやだなと思うことは、今日は名前書かなくてもいいからと言うと、ストレートなことを書いてくる。でも、やっぱり自分の名前できちっと教員に対しても語っていくということが、先ほ

どの柳田国男が力説していたという、日本の教育で必要なところだと痛感するんです。ただ、そういう教育をこれまで受けていないから、uneducableだと言いきることもできない。むしろ問題は、今大学に入ってきた学生とどういう風にして、本当にコミュニケーション出来るか、さっき教育というのは対話だと言いましたけれども、そういう対話の教育をしていくための心構えはあるとして、具体的にどうしたらいいんだろうか、そこが問題なんですね。何かいいアイディアがありますか？

土田：これはないですね。アメリカで教えていると困るのは質問が多くて、人の話の最中に来るんですよね。Let me finish my talk first.なんて言いながら、でも時々はGo aheadということで話させるわけですよ。でもそれはありがたいんですよね、教師にとっては。それが授業を作っていくわけなんで。ところが日本の学生はまったく死んだ魚みたいな顔をします。初等中等教育でさんざんカマトトであることを仕込まれてしまったんで、１８才の段階でもう何が出来るかといって絶望にかられますが。もっとも、幸いなことに今の私の科目はおおかた少人数なんですね。ですからこういうふうな（円卓ふうの）設定にして、彼らと同じ高さになって話すこともできますし、また研究室に来て何であれ、一番肝心だと思うことを質問の形で投げつけるなど、色々な手だてをします。また、学生が研究室に来て話していくことも歓迎しています。これは、時には負担でしかないのですが。

ひとつの方法として、これは中野先生にお願いして開いていただいているのですが、ディベートの科目。さらに、アメリカでは普通に行なわれているExpository Writing のコースに見習って、書くことの訓練を周到に行なうコースを計画中です。今までの日本の大学教育では学生の、単なる出席ではない、参加ということを軽視してきた。学生からのフィードバックを考慮に入れないで、教育ということはできない。

しかし、そうだとしますと、我々は二重の困難を抱えていることになります。一方では、現代世界の非常に反（脱）人間的、反教育的な場面にいて、自分も細分化された分野の専門家として修練していかなくてはならないという状況にありながら、他方、教育という本来的には全人的な営み、人間的知的成長と関わらなければならない。この点では、南短の人間関係科ではヴォランティア活動や合宿研修などを、私どもからすればとてもできないと思われるほどおやりになっていて、日本の諸大学は学ぶべきことがたくさんあると常々思っています。

山口：中野先生のおっしゃるのはわかりますが、やはり土田先生の言われるように、学生達は本当に長い教え込まれる歴史を持って人間関係科に来るわけで、一挙に１００人でディスカッションが出来るような状況になるとは思えないんです。ですから、ジャーナルを書いてもらうということは、学生達はそこで考えてそして紙の上に自分の意見を述べることが出来るわけで、それが出発点な

んだろうと思います。そういうことを長く続ればきっと変わってくるだろうと思います。人間関係科の二年間だけではやはりまだ１００人位のレベルになるととても出来ないというか、もっと少人数になるとかなりいろんな話し合いが出来るんじゃないかなと思うんですけれども。ついこの間、学生達とスキーに行って、そこでいろいろな話しをしたんですけれども、やはり学生達は人間関係科に入って“あなたはどう考えるのか”と問われて最初はびっくりしたと言ってました。その時に一番疑うのは、先生は正しい答をやっぱり持っているのではないかということですし、先生はそれを求めているんじゃないかという疑いから始まるようです。そういった疑いの中で、先生が自分達が言っていること、話していることを聞いてくれるということを信じることが出来るようになるまで相当時間がかかるといいます。例えば半年とか、或いは一年とかいった長さです。それは過去のその人の歴史によると思ういますけれども、本当にここでは自分が感じたことや考えたことをしゃべってもいいんだということを信じることが出来るようになるまでそのくらい時間がかかるという風に学生達は言っているのです。私達が人間関係科のカリキュラムを組むときにやはりそういう学生の発達の問題というものを抜きにしては考えられないという風に思いますけれども。

竹内：実は一昨日までずっと小さい子供達の教育の問題で対談みたいな討論みたいなものをやっていたもんだから、大学のことを小中学校高校とずっとつなげて、さっきから考えているんだけれども。難しいことで、結局小学校が今一学級少なくなっても３５人でしょ？それから全部つながっているという思いがあるもんだから、かなり絶望的になるんですよね、話を聞けば聞くほど。そこで二つあって、山口さんの話と似たようなことを言おうと思ったんだけれども。大学に入ったとたんから、今までの概念を壊しにかからなければならないということがありますね。その期間をどのくらいの期間として考えるかということを、僕は宮城教育大学にいた時には、半年から一年と思っていたんです。

だけれど、だんだん伸びてきて、一年半じゃなきゃ無理かななんてと思い始めて、それから後こっちにきてみたら二年かかってようやくなのかなという感じがしないでもない。自分が感じたことを言っていいんだということになるまでには、だいたい半年くらいかなあ？概念を壊すというところまでいってないんですよね。１：３０でもしかたない、とにかく全力を挙げて自分が人間として今までの既成概念と対決するというか、そういう姿勢をまずは教員としては持つと。それが喧嘩になろうが、なにか壊れることになろうがそれはしかたがないというような感じを僕は出発点として持つべきではないかというようなことしか今のところわからないという気がする。それを裏返しに言いますと、子供が小学校に上がるときに私は覚悟したわけですけれども。小学校には殆ど何も期待できないと。その時に、この間問いただされた訳だけれども結局考えてみると子供というのを今戦場に送っているんだという言い方をした訳です。学

校というのは、いわゆる学校と思わない。もう社会である。子供にとって。そのままで送り出して、そこで負けないようにどうやってやっていくかということの訓練をやっているんだと。そうすると、もし１８才でこの南短にきたとするでしょ？そうするとそれは戦場から帰還した人達だな。戦場から帰還して傷だらけになっているのをどうやって休ませて、自分の身体にして立たせるかと言う、そういうイメージの方が僕は強いですね。まあ社会に出て役に立つか立たないかという問題が沢山あって、役に立つためには何かを手渡さなくてはいけないという問題があるんだけれども、それは非常に小さなものでいいと。ただそれが一本のナイフにでもなればいいというものを渡さなければいけないという使命感みたいなものだけはありますけれども。どうも帰還兵という感じがする。帰還兵として扱うというか。当人はそう思ってないわけでしょ？当人はこれから華々しいところへ行くというわけだから。

土田：さっき申しましたが、ヴォランティアワークといいますか、社会との交流を図るということは有効だと信じています。それはなぜかと言いますと、学生それぞれが単に mental に処理された知識を操るのではなくて、人間全体として感じ、悩み、考えるということがありますから。どんな人でも、人と人（しかも往々にして人生の危機におかれた人）と、人間として、接触・交流しなければならないとなると、何かしら感じる考えることがあるんです。そこで知識として受け取っていたに過ぎないことばと真剣に向き合わなければならない。時には、先生はそう言うけど違うんじゃないか、というようなこともあるわけですから。教育の復活のためには、これも一つの方法であると思います。フィリピンに学生たちを連れて行ったときも、学生たちが教育に知識に人間的に立ち会うようになるということを経験しました。

また、手前味噌になってしまいますが、実はわたしが宗教思想が専攻でありながら生命倫理に向かったのも同じ理由があったのです。いのちや健康、生死のことは一人一人が考えなければならない問題でもあります。それが教育の場面を作り得るのです。たとえば、障害新生児を妊娠している。羊水検査で２１トリソミーがあっていわゆるダウン症、しかも心臓疾患ももっていそう、などということが分かる。この子がたどると予想される経過、１０歳ぐらいの頃の様子、２０歳頃の様子。それらがその子と家族やまわりの人々との相互的な対処・対応でどのように変わり得るか。これらは重い人間的な問題として、みんなに関わりがある。一義的な模範解答があるわけではない。従って、単なる知識では済まされない次元がある。こういう主題も、知を人間化・主体化してゆく上で大切なのではないか、などと思っているのです。

アメリカの良質の私立の初等・中等教育は１クラス１０数人ぐらい。高校では円卓を囲んでそれぞれの顔が見えるところで議論が交わされる。日本では当分そんな条件は望めませんけれども、教科の内容を工夫することなど、できるだけ全人間的な次元を取り入れなければ、などとは思います。

竹内：林竹二先生は、子供達との授業でも、本当に子供達とつきあうような授業は毎日毎日授業課題に追いまくられている教師達には難しいことなんだ、でも一年に一回だけやってみようという言い方をされてましたね。しかし一年に一回本当に子供達とぶつかるということで何かが残っていくというか。そういうことは実際にあり得るようですね。

津村：今のお話でいくと、authorityに隠れられない現場というを作れるかということや、教科内容を変えるというのもそうでしょうし、教室場面で教員が複数いるということ自身もそうでしょうし、何らかの方法でいかにオープンな教育場面を作れるかということが大切なような気はしますけれどもね。

土田：本当にそうだと思います。日本人の学生は聞いた風なことばかり言うでしょ。又そういう教育しか受けてこないんですね。模範回答をいつも用意しているか期待している。自分が考えるんじゃなくて、思考の過程を全部捨象して、模範回答を知っているというのが優秀な学生ということになっているわけで、これは本当に反教育的なやり方ですよね。

津村：余談ですけれども、僕はコンピューターをを使った授業をし、学生達に自由に使ってもらっているんです。今コンピュータ室は利用記録として記帳してもらうだけで自由に使っているわけです。名前を書いて下さいとただそれだけですから。利用料金も何もいらないし、ただ名前を書くだけなんですけれどもね。何人か書いているんだけれども今日の日付で記録がないんです。で「書いて下さい」と言うんだけれども、なかなか書かない。おかしいなと思って、「どうして書いてくれないの？」と聞くと、一人が正直に言ってくれたんです。「書いているとひょっとして壊れたときに私の後をつけられるんじゃないかと思う」と。そういう不信感を持ちながら学生達はいるのかと思うとちょっとがっかりというか、残念な思いというか。だから先ほどの中野さんの話の名前を書いて先生に書くどころじゃない状況かもしれないのです。ただ名前を書くことだけでも彼女達は大変な状況にいるという感じがしますね。これが現実と思うと、がっかりすると同時にこの学生達とどう付き合っていくのかというようなことを、もう一度学生と教師との信頼関係というようなことをどう取り戻すかということを改めて考える機会を与えられました。

竹内：ちょうどその反対の笑い話みたいなのが。サローヤンの短編があるんですが、自分の高校時代のことをかなり復元するみたいに書いているんです。それのポイントというのが、古代史の授業の一番最初の時間が出て来るんですが、色々そこまでのいきさつがあるんだけれども、とにかく先生が本を開きなさいと言う。「ここに恐竜の骨の化石がある。これは2万年前のものです。」教科書に書いてあるとおりに言うんです。そうするとぱっとサローヤンが手を挙げるわけだ。「先生にどうしてそれがわかるの？」と聞く。とたんに先生が棒立ちになるわけです。それ以後の先生の反応は大騒ぎになるわけですが。そのやり方がいっぺんに高校の他の仲間に広がる。ありとあらゆる学級でそれが流行始

めるわけだ。「どうして先生にそれが分かるの？」といろんな生徒が教員を問いつめ始める。これは僕はとっても面白かった。教員の固定観念とまるで発想が逆であるわけですね。そういう風にならないかなあと。これは夢物語みたいですけれども、とても面白かったですね。小学生でもある程度できないことはないというね。挑発することは必要なんだけれども。

津村：そういうのは先生の点数は悪いんですね？

竹内：勿論。校長先生に呼ばれてどうだったとかこうだったとか沢山書いてあるんです。とうとうしかしその先生は辞任してしまうんです。

山口：いろんなことがあるんですけれども、やっぱり教師が変わらないといけないというか、特に日本の教師の場合変わらないといけない。アメリカの教師の場合は変わらない人は首を切ればそれでいいという風なことがあると思うんだけれども。日本の状況から考えていくと、教師自身が変わるための仕掛というか、そういったものがどうしても必要になるんじゃないかなあと。これは自らがそれをやり始めるとは思えないわけで、むしろ大学経営全体を考えるところが教師のあり方を問い直すような働きがないと、たぶん自発的にはなかなか起こってこないんだろうなという気がしています。もう一つは、お話の中で私も南短の将来のことを色々考えるんです。教育系それから看護系これはいける。福祉系いける。という風に思うんですね。将来のマーケットという様なことを色々考えると。土田先生は向こうで経営はダメと一言言われたんですけれども。そのことがちょっと聞きたいというか。どういうことですか？例えば女子教育で経営というのが今アメリカの方では・・・。

土田：女子教育だけじゃなくて、いわゆるビジネス校というのは７０年代の終わりから８０年代にかけて数多くできたんです。そしてMBA(master business administration)というのが飛ぶように売れたんです。そしてアメリカの産業の空洞化を更に促したと。優秀な学生はみんなmoney businessに入って行ってしまって、産業の根幹には行かなかった。そういうことがありました。女子の方でもアメリカの色々な学校のカタログなんかを見ていきますと、businessがmajorに入っている学校が出来ました。それらがおしなべて今不況であります。それは結局、どんなに金融や経営をあれこれ操作しても、基本的には社会全体の問題だということに気がついてきたからです。そして色々なお金が絡んだスキャンダルがありました。それがやっぱりよくないことだというふうに社会的に反省されている時期なんです。だからこれはbusiness administrationという訓練が無効になったというわけではなくて、たくさん生み出しすぎてしまったんです。それからもう一つはアメリカ社会特有のことなのかも知れませんが、個人の利得だけを図るという時代は、今、過ぎ去ろうとしています。今どこへいっても聞く言葉はcommunitarianismですよね。それは色々な形で展開されています。何とかしてバラバラになってしまった人間をもう一度繋いでいく運動をアメリカは始めていて、そういう中ではbusinessだけというのは、

もう疑問視されてきてはいます。社会的な倫理性という問題が出てきておりまして、その点から言われているんです。ですから８０年代には、business schoolを設けることによってアメリカの大学は一息ついたんです。それで破産をちょっと遅らせることが出来たんです。ところが９０年代に入ったらそのbusiness schoolで儲けた分も今はどんどん失いつつある。本当にもう一度大学の冬。だから今世紀最後の１０年間一番きつい時期だという感覚だろうと思いますね。日本の場合ですといつも時差がありますから今の段階では経営学科を、といえるのかもしれませんが、どうでしょうか。私がアメリカにいた８０年代の中ごろまでは、日本から経営学の先生がたくさん来て、どこへ行っても日本の経営の話を誇らしげにしていました。でも今では、日本の経営をまともに相手にしている経営者はアメリカではいません。もうそれは全て過去の話です。それ見たことかというふうに今は言われている時代ですから。

竹内：コミュニティーを作っていく運動ですね。その主体になっているのはどういう人達ですか？

土田：普通の人達です。本当に。でも当然のことながら、学生達がそれに入っている場面もありますが、organizedしている人々は本当に普通の人々ですね。脱サラして何になるかといえばそういう運動をしてしまう人が多いんです。環境の問題がそうですね。リサイクルの連帯を作るというのがあります。また単身者や、母子だけの家庭がアメリカには沢山ありますので、そうした人々の連帯もさかんです。

竹内：日本にもそういう動きが方々で出始めているとは思うんですが。僕は日本のその場合、ちょっと発展すると企業が丸がかえにするだろうという予測を持っているんです。今おっしゃったみたいな。だからアメリカではどんな状態でそれが動いているんだろうなと思いまして。

土田：企業は場合によってはスポンサーになることがあります。企業の社会的責任というのが今アメリカの企業の間の合い言葉です。だから社会に利益を還元するんだということです。アメリカにおける日本の企業もかなりそれを見習って寄金などをするようになってきました。これは本当にさかんです。皮肉に、それは弥縫糊塗にすぎないということは出来るかもしれませんが、そうとばかりは言えない。

竹内：しかし企業の方と一般の人達の動きというのが共通する何か倫理感というと大げさだけれども、何かがあるという風な感じですね、土田さんの話を聞いていると。

土田：一つはいい場面もあります。さっきの伊藤先生の話ではないですけれども、ボランティア・スピリットにつながるような。でも本当はアメリカの社会がそこまでボロボロに壊れてしまったということがあって、これ以上やっていけないという感覚を多くの人が持っていると思うんです。

竹内：僕は日本も今そういうのに近い崩壊の仕方をしているという風に、非常

に急速な崩壊の仕方をしていると思うので、そういう動きは多分出てくるけれども、両方に共通する何かというものが見つかるかどうか。見つからなかったときにはそれは非常に妙なことになるだろうという、そういう予想を持っていたものですから、今伺ったんです。

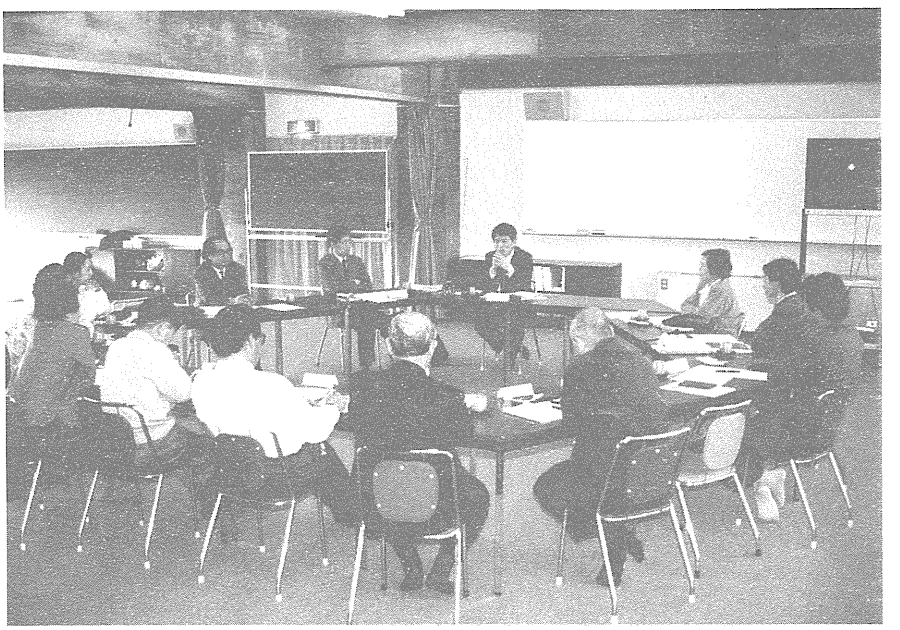
星野：今山口さんが質問されて、経営或いはbusinessということが言われていたんです。私はこんな風に思っています。これは、今日、土田先生がずっとお話になっている根底に流れているものとして、人間だとか人間的なものだとかを終始おっしゃっていると思うんですが、今までの、私はそこまで突っ込んで言えませんですけれども、経営だとかbusinessだとかいった場合にはやっぱりその視点がまったくないと思うんです。格好よく人間をどうだとかこうだとかは言っているんですけれども、本気でそれをやり出すと企業は潰れてしまう。従来の企業の感覚、従来の経営の感覚からいったらそれは維持できなくなるだろうと思うんです。それは、やっぱりbusinessそのものを大きく転換しないことにはどうにもならない面がある。そこまで追いつめられないと、きっとそうはならないんだろうと思います。しかし、これはおそらく教育でも医療の世界でもそうなんですが、businessの世界でも、もしこれから私達が取り組むとしたら、本当に人間ということを根底においた、その視点で経営学をもう一回考えるとか、あるいは、私は経営学まで言えませんですけれども、会社そのものを考えたら、組織そのものをその時点で見直しながら、そういう感覚を持った人を育てていくといったらいいんでしょうか。お金のことを言っているときだってmoneyと言いながら、やっぱり人間ということをどこかでくっつけているんですが、それは本当に人間を尊重していない、そこまでのものではなく、そういうphilosophyを持たないでやっていると思うんです。だからそう考えるとそういうものを根底に持った上でmanagementできる人、その辺の所を、これは時間がかかるんでしょうけれども、長期的にその辺の視野を持った人を育てていく、そういう学生を育てていくということが必要であると思う。これは一例としてmanagementのことを言ったんですけれども、そういう風に考えていくと、私は経営だって、やっぱりその辺の視点を入れることによって、もう一つ深めていくことが出来ると言うか、新たな視野を作ることが出来るんじゃないんだろうかと思ったりしているんですが。その辺はどんな風に・・・。

土田：日本人が日本のという形容詞を抜きに、as a human person, as a human beingとして語り出せるようになってきたと私は思うんです。どんなに明治以降の近代を皮肉に眺めたにしても、それでも着実に世界という意識を取り込んできている。がきデカだと言われながら（本当に幼稚だと思うんですけれども）、こだわりなく外国の人と接することが出来る若者も出て来ていると思うんです。もう一度、「人間として」というこの曖昧な言葉について率直に語れる日が私は来るだろうと思っているんです。ただそれに向かって我々は知的作業としておかなければならない仕事は沢山あるわけです。たとえば、人

間観ということを考えましても、深層心理学とか社会学とか、生物学の見方、はては人工頭脳との比較などによって、よってたかって人間の暴露、解剖、定量化をやって、人間性を断片や図式に卑小化し還元してしまった。科学技術化された見方で「幻想を剥ぎ取る」ことによって、古来の「人間の尊厳」などということを聞くと今では首をかしげるか、一笑に付すというのが流行になっているようです。こんななかで、「倫理性」などと言えば冷笑に会うばかりかもしれませんが、しかし生物学やほかの諸「科学」がたとえば人間と猿とを同列に並べて見るにしても、人間ならではの倫理的責任が無くなったわけではなく、否むしろ、さらに思いを深めなければ、ともに考えなければ、ならない時にわれわれは生きているのではないでしょうか。

しかし、例えば私のばあい、新しい死生観を展望してゆきたいのですが、これは大変な作業でもある。生命倫理学は憂鬱な学問で、できれば忘れていたい、関わりになりたくないようなことを苦しみながら考えなくてはならないのですが、しかし現代人が直面している問題性から顔を背けるわけにはゆかないでしょう。これは一例ですが、知的な営為の人間化を心がけるものとしては為すべき課題はまだ山積みになっています。

竹内：大変よく分かる話なんだけれども、実践的に言うと、どんなにやったところで人間はその考え方で限界というものを背負っているわけでしょ？だから例えば私なんかが古くさいなあと思うようなおばさん達がやっていることを見ていて、そのこと自体はひどくなんかこういうことでは困るんじゃないかというようなことをやっているにもかかわらず、その中にある人間的なものを見ることが出来るということがありますよね。結局はそういう様な自分、極めて非常に狭い有限な自分というものを覚悟しながら、人にぶつかるよりしかたないんじゃないか。学生にぶつかるのも同じことで、そこの所がちゃんと見えないとぶつかれないと言っていたら、もう動きがつかないという、そういう思いをこの頃かなりするんです。例えば真宗のお念仏を唱えながらやっているおばさん達の中にものすごく古くさいものと同時にものすごくこれはすごいという人間的なものを背負っているものがあって、そういうことと付き合っていくというか、そういうものを見ていくというか、そういうことしか、今、出来ないんじゃないかという様な気持ちも一方にかなりあるんです。今のお話は大変僕は問題としてはよく分かるんです。よく分かるという一方に、とてもそこまで生きてはいられないだろうという風に思うから。その前に覚悟しなければいけないという感じを持つんです。

大森：いろんな問題を含んだ話になったんですけれども、時間がきてしまいました。難しい問題の前に立たされているなあという感じがしています。それから結局は自分がどう生きるのかというようなことに結びついてくるような、或いは自分の教育自身を、自分の教育の足元をもう一度見直すというか、そういう様なことになってくるのかな、という感想をもちました。土田先生にはお疲

れのところ長時間にわたってお話ししていただき、又参加した皆さんにも色々とご意見を言っていただきまして、有意義な時間がすごせたと思います。今日は本当にありがとうございました。